



Title	不思議な暗合：太宰治「地球図」・高木卓「獄門片影」・坂口安五「イノチガケ」
Author(s)	松本, 和也
Citation	太宰治スタディーズ. 2010, 3, p. 145-154
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/102889">https://hdl.handle.net/11094/102889</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 不思議な暗合

—— 太宰治「地球図」・高木卓「獄門片影」・坂口安吾「イノチガケ」

松 本 和 也

1

「地球図」(新潮、昭10・12)は、太宰治作品群<sup>テクスト</sup>において、また『晩年』収録作品群においてもマイナーな印象が否めないが、新井白石『西洋紀聞』などに描かれた宣教師 Giovanni Battista Sisti をめぐる物語(以下『Sisti 物語』)というモチーフは、近しい時期に他作家によっても小説化されており、その意味で重要な意義を担っている。まず、「地球図」と踵を接して、高木卓「獄門片影」(「意識」昭11・1)が発表される。同作発表時には、無署名「後記」(「意識」昭11・11)として次のような注釈が付されている。

巻頭高木卓君の小説は、新潮十二月号所載の太宰治氏作『地球図』と同じ材料を取扱ったものであることは、読者諸賢の御気づきの事と思ひます。不思議な暗合なのであり

ます。(略)高木君の小説は太宰氏のそれより前に書かれたか、或は同時かであつて、決して太宰氏の材料を追従されたものではありません。

高木卓と太宰治とが、時を同じくして『同じ材料』を小説にしたということ、しかも両作家に『交渉』がなかったことが、驚きとともに『不思議な暗合』と評されている。

その四年後、切支丹ものの嚆矢として、坂口安吾が「イノチガケ」(「文学界」昭15・7、9)を発表する。「マルチル・マルチレスの数々」と副題された前篇は、一五四七年以来、一七〇〇年に日本切支丹が全滅するまでの年代記だが、それにつづく「後篇ヨワン・シローテの殉教」は、『Sisti 物語』を中心的なモチーフとした小説となっている。

このようにして近しい時期に発表された三つの『Sisti 物語』だが、これまで三作品を視野に収めた比較・考察はみられない。

それぞれの作家性・作風の差異はもとより、「地球図」は翻案小説、「獄門片影」は歴史小説、「イノチガケ」は切支丹もの、といった具合に、後に文学史上におけるジャンル・配置を異にしてきたこともその一因だと思われる。

とはいえ、同時代においては三つの『Sidoti物語』の通底性に注目していた批評もあった。大局としては歴史文学を論じつつ、具体的には橋本栄吉『天平』にふれる文脈で、「文学の実体文芸時評」(『中央公論』昭16・11)の大井廣介は次のように評している。

作家が己が現実には何等かの接触なり刺戟なりを感じとればこそ歴史に手をつけるので、従つて作家めいめいの取材範囲にはいつてくる事象は非常に限定されるわけだ。太宰治、坂口安吾、高木卓と同じ世代の作家が三人までも等しくシロオテの殉教を手掛けたのは、決して偶然ではあるまい。

ここで大井は、三作家それぞれの仕方ではあるが、等しく《現実には何等かの接触なり刺戟を感じ》たことで『Sidoti物語』をモチーフとした小説が書かれたとみている。つまり、そこには《偶然》以上のもの——《不思議な暗合》があったと示唆しているのだ。

さて、イタリア人宣教師 Giovanni Battista Sidotti (一六六八

—一七一五)は、宝永六年(一七〇九)、鎖国時代の禁制を破つて屋久島に渡来した。当初、Sidotiは長崎で取り調べを受けるが、後に江戸に護送され、新井白石が審問にあたることになる。白石は、世界地図をはじめとした『西洋の知』を積極的に学ぶものの、キリスト教には関心を示さない。結局Sidotiは獄死してしまつたが、その生ノ死は日本切支丹殉教史に残されて今日に至る。<sup>(3)</sup>

こつした『Sidoti物語』は、新井白石『西洋紀聞』他、次節で言及する書物などによって人口に膾炙していくのだが、三作家はそれぞれの典拠に即して創意を加えていく。

太宰治「地球図」では、第一にタイトルが注目される。ここでは、人物ではなく物(世界地図)が前景化されており、そのことによって「地球図」は、国籍・言語・知識・地政学などをめぐる(国内、国内/外の)『境界線の物語』として編みあげられている。第二に、冒頭に「ヨワン榎は伴天連ヨワン・バツテイスタ・シロオテの墓標である。」とあるように、「地球図」はシロオテが死んだ時点からその事跡を振り返る構成を採る。

語りの枠組みに関しては、『時間』を再構成し、状況を説明する語り手が設定されているが、この語り手は登場人物から完全に独立した、全知の語り手の役割を果たすわけではなく、判断の主体(帰属)が『はつきりとは分らない場合が多い』<sup>(4)</sup>。さらには、二つ以上の言語が交わされる翻訳の場面には現在形の文末表現が差し挟まれ、状況をアレンジしていく。<sup>(5)</sup>

高木卓「獄門片影」は、江戸での白石によるジヨアン・バプチスト・シドツチへの訊問の場面から書き起こされる。冒頭部に代表されるように、特徴の第一は、白石とシドツチがクロージアップされた構成であり、語り手は兩人ともに内的焦点化して内面までをも細かに描いていく。また、訊問が進行していく際には、折々シドツチの過去や当時の日本の状況を説明的に差し挟んでいく。こうした実体化された語り手は、たとえば、「宝永年間（一八世紀初期）の通詞たちは、今日から見れば信じ難いほど奇妙なことだが、蘭語の通訳を職業としながらも、洋書を読むこと及び私有することは厳禁されてゐた。」シドツチ訊問に際し白石が例の没収禁書を調べて予備智識を持つてゐたことは屢々述べた通りだが、などと自己言及の身振りをもみせていく。そのことによって、現在という語りの位置（時間）を明示しながら過去／現在を切りつけた上で、節合していく。この「獄門片影」第二の特徴については、『現在相応性』という表現に集約される『歴史小説は最初から現代に関係があるべき書』<sup>6</sup>だという高木卓「歴史小説論」での主張とも即応している。

坂口安吾「イノチガケ 後篇ヨワン・シローテの殉教」は、前篇を引き継いだかのような年代記的な叙述スタイルの「その一 船出」以下、「その二 上陸」、「その三 江戸」、「その四 イノチの日」と、シローテを主人公として遇し、日本での出来事を順を追いつつ、基本的にはいわゆる全知の視点によって構成されている。タイトルにも明示された通り、殉教を遂げるこ

となるシローテの「イノチガケ」の言動が主題であることは間違いない。発表当時にもそうした受容が確認できる。一見、淡々とした叙述ではあるものの、その実、多彩な典拠をもとに書かれた「イノチガケ」は、成田龍一によれば『第三者的な審級からの「史実」を固定する書き方が、避けられて』おり、そこに『徴候』からしか出来事には接近し訴求できないという安吾の歴史認識と歴史作法<sup>8</sup>が見出されてもきた。

こうした三作品に照準をあわせながら、本稿では小説表現の重なりと差異、あるいは典拠からの三作家によるオリジナルな展開などではなく、近しい時期に三作家が『SOS! 物語』をモチーフにした小説を書いたという事実<sup>9</sup>、それ自体に注目する。そこには、作家個々人の意図には還元しきれない力学（テクストに折り畳まれた共通の外部）を想定することができる。逆にいえば、水面下の歴史的な動向——『不思議な暗合』の徴候的な顕現こそが、右に紹介した三つの『SOS! 物語』をモチーフとした小説であつたはずなのだ。

さらに、三作品の初出／単行本刊行期に注目すると、興味深い二つの歴史軸が浮上してくる。「地球図」は「新潮」（昭和12）に発表後、『晩年』（昭和11・6、砂子屋書房）に収められる。「獄門片影」は「意識」（昭和11・1）に発表され、その四年後、『歌と門の盾』（昭和15・9、三笠書房）に収録される。「イノチガケ 後篇ヨワン・シローテの殉教」は「文学界」（昭和15・9）に発表の後、『炉辺夜話集』（昭和16・4、スタイル社）に収めら

れる。このようにみてみれば、初出誌／単行本が世に問われた時期が、昭和一〇―一一年と昭和一五―一六年とに集中し、逆に昭和二一―一四年がエア・ポケットになっていることが判る。ここで見通しを述べておくならば、この歴史軸の分布と『Sōshi』物語に託された歴史的な力学には、文壇モードなどの条件とも交錯しながらの相関関係が想定される。

以上の問題関心から出発する本稿では、『Sōshi』物語をモチーフとした三作品をめぐる歴史的條件の素描を通じて、『不思議な暗号』へとアプローチするステップとしたい。

## II

前節でもふれたように、「地球図」「獄門片影」「イノチガケ」には、江戸時代にSōshiと白石以下通辞が翻訳を介して言葉を交わす場面が多々描かれている。そこには、Sōshiが学んだ外地の日本語や、国内での標準語／方言、国外を視野に入れた国語／日本語の認識など、言語をめぐる問題系が巧みに描き込まれ、そこに歴史的な力学が関わっていく。

ここで、三作品発表期において意義深い、審問の際の白石から通詞への注意を引いておこう。(引用は「獄門片影」からだが、「地球図」「イノチガケ」にも類似箇所がある。)

「此の乾坤図によれば、イタリヤとオランダヤとは同じエウロハの地続きだから、恰かもわが国に於て、長崎の者

が陸奥の方言を聞く場合、最初は聞き分け難くても耳が慣れればやがて大意が通じて来るやうに、オランダヤの言語を以てイタリヤの方言を付度すれば、凡その意味は推量が付くであらう。従つて彼(シドツチ)の申し立てに理解し難い点があつても、各々がたは語義を想像して、憚らずそれがしに伝へて戴きたい。(略)――いや、失礼ながら、推量や想像からは誤りも生じやうが、それを一咎め立てるそれがしでもないから、その点は何卒お氣遣ひの無いやうに。」

言葉をめぐる具体的な右の注意は、江戸時代のそれであると同時に、昭和一〇年代の歴史にも折り重なってくる。中国大陸への派兵によつて拡張された国土<sup>⑨</sup>外地が、「国語」の自明性を問いながら「日本語」という問題を浮上させ、国内／外の政治動向の基盤として国民国家が再編成される過程で方言は標準語に排除／包摂されゆき、あるいは東洋／西洋という問題構成がさまざまなレベルで顕在化し、儒教やキリスト教にとどまらず、技術や文学なども含めた文化間の翻訳が問い直されていく――『Sōshi』物語をモチーフとした「地球図」「獄門片影」「イノチガケ」三作品は、こうした動向と無縁ではないのだ。

こうした関連を探るため、ここで改めて典拠から考えてみたい。すでに、「地球図」「イノチガケ」に関しては、先行研究によつて典拠が高い精度で明らかにされている<sup>⑩</sup>。また、「獄門片

影」に關しては、高木自身が「閉口した話」（意識 昭11・1）で『白石自身や新村氏松崎氏等の著書をあれこれひっくり返してみた』と述べており手がかりになる。そこでは、新井白石に加え、言語学者の新村出（明9・昭42）とキリシタン史研究家の松崎実（明30・昭19）の名があげられている。両者の著作のうち、『Sidotti物語』を描いたものとしては、言及程度だが新村出『南蛮記』（大4・8、東亞堂書房）、『南蛮廣記』（大14・9、11、岩波書店）と、松崎実『考註 切支丹鮮血遺書』（大15・2、改造社）とがあげられる。ここで、三作品において主要典拠とされた書物を一挙に見渡してみよう。

山本秀煌『江戸切支丹屋敷の史蹟』（大13・6、イデア書院）  
山本秀煌『日本基督教史 上巻』（大14・9、新生堂）

日本名著大系『南蛮紀聞選』所収「西洋紀聞」（大15・2、洛東書院）  
〔原本は洛陽堂 大正七年刊〕

松崎実『考註 切支丹鮮血遺書』（大15・2、改造社）  
姉崎正治『切支丹伝道の興廢』（昭5・6、同文館）

新井白石／村岡典嗣校訂『西洋紀聞』（昭11・10、岩波文庫）

ここに、『Sidotti物語』をモチーフとした三人の作家が、いずれも大正末期を中心に刊行された書物に典拠を求めている様相が浮かび上がってくる。吉野作造、新井白石とヨワン・シロー

テ』（大13・7、文化生活研究会）刊行なども想起すればなおのこと、この時期には、『Sidotti物語』が相次いで公刊されていたのであり、こつた歴史的な条件を成立せしめた、典拠／創作をまたいだ力学の発動が想定される。しかも、さきにあげた『考註 切支丹鮮血遺書』（前掲）には、次のような新村出「改版序文」が付されている。

近ごろ文芸界に於ける吉利支丹趣味の流行、美術界に於ける吉利支丹題材の好尚、史学者間に於ける吉利支丹史料の探訪考究、文献学徒に於ける吉利支丹典籍の蒐集複製、いづれもみな最近学芸上の著しき現象と目すべく、それにつれて世上一般の人々の吉利支丹に関する興味と智識とも亦頗る普及するに至れり。

大正末期に『Sidotti』関連書物を介して顕在化した力学が、昭和一〇年前後に翻案小説として再浮上してくる——こうした歴史軸と、それから『Sidotti物語』に不可欠の要素である新井白石とに注目してみるならば、上記三作品の発表と近しい時期に、羽仁五郎『白石・諭吉』（昭12・6、岩波書店）が上梓されたことにも何かしらの連関が想定できる。白石の事跡を論じていく羽仁は、『Sidotti』との審問については次のように言及していた。

白石が当時幕府の鎖国及び切支丹嚴禁を冒して果敢にも



万里波濤をこえて単身わが大隅海岸に来著した羅馬伝教師  
ジヨブ・ニ・バツティスタ・シドティの処置乃至応接につ  
いて積極的意見を提出し、ついで自らその審問にあたり  
「略」敢然として欧羅巴思想學術海外事情の研究に著手し  
封建主義の教学の抑圧の暗黒の中にも盲目にされきつてし  
まうことは出来なかつた我が国民人民の国際思想のために  
ひとすぢの曙光をみちびき入れようとし（以下略）<sup>11</sup>

その上で、羽仁は『西洋紀聞』：『采覧異言』といった白石の  
著書をあげ、《低劣な対外意識の中に、はじめて高明高潔の国際  
意識に向つてのめちをひらくことに成功した》と高く評価して  
いる。山城むつみは、昭和八年に逮捕された羽仁に関して、転  
向を経て釈放された後の『白石・諭吉』（昭和12・6、岩波書店）  
や『ミケルアンジェロ』（昭和14・3、岩波書店）と、逮捕前の著  
述との間に文体の変化をみている。山城曰く《羽仁は「民衆」  
に語りかける文体を選んだ》というのだ。ここで改めて『Sidoti  
「物語」およびそれをモチーフとした小説三作を想起してみる  
ならば、鎖国期に密入国の宣教師との審問を通じて「西洋の知」  
を学んだ白石にせよ、禁教下の日本に潜入し布教を目指し殉教  
したSidotiにせよ、大正期以来の左翼運動の高揚から転向の季  
節をへたどつた昭和一〇年前後の運動や文学、さらには  
国内／外の政治をめぐる状況のアナロジーと見立て得るはずだ。  
こつした、白石／Sidotiを参照点にして、日本から「西洋の

知」を捉え直していこうとする動きは、アジア・太平洋戦争の  
進行に伴い、こと「近代の超克」をメルクマールとして顕著に  
なつていくが、その昭和期における端緒は昭和一〇年前後に  
あつたとみてよいだろう。前節でふれた翻訳と国語／日本語  
という言語をめぐる二つの問題系もまた、「地球図」、「獄門片  
影」、「イノチガケ」三作品に通底する歴史的な力学の小説的具  
体化といえよう。

事実、昭和一〇年前後には翻訳文学ブームとでも称すべき現  
象が起きていた。匿名評論・XYZ「スポーツ・ライト」（『新  
潮』昭和10・1）では、「翻訳全集の全盛」という小見出しの下、  
《たとへばゴーゴリ全集とか、ドストエフスキ全集、ツル  
ゲーネフ全集、チエホフ全集、ジイド全集、バルザック全集、  
ブルウスト全集など、外国の高名な作家の全集が、続々として  
出版されてゐる状況がとりあげられている》<sup>12</sup>。また、青野季吉・  
本多顯彰・阿部知二・河上徹太郎・中島健蔵・中山省三郎・伊  
藤整・芹澤光治良・中村武羅夫による座談会「翻訳文学よもや  
ま話」（『新潮』昭和11・4）でも《どうして日本ぢや金にもなら  
ない翻訳が流行るんだらう》という河上の問いに、中島は次の  
ように応えている。

中島。それはやはり、西洋の考へ方とでもいふか、さうい  
ふシステムが入つてから日が浅いだらう、日が浅くてまだ  
何か身に着いてゐないしね、さういふものを日本の文化の

上に持つて来れば新鮮に大きくはたらくといふ可能性が非常に大きいんじゃないかね。

ここでは、日本／西洋という二項対立図式が翻訳ブームの根因として指摘されている。

してみれば、『Sido』物語 をモチーフとした三作品とは、江戸時代の殉教譚でありながら、すぐれて現代的な課題に挑んだ小説だったのであり、こと、はやい時期に小説化された「地球図」「獄門片影」は、歴史の力学に敏感に反応したテクストだといえる。「イノチガケ」の時期になれば、「近代の超克」まではあと二年、また、日中戦争以降強く意識されだした、外地での日本語教育の必要性に対処する態勢も整えられつつあった。

こうした動きは、『Sido』物語 に不可欠の人物・新井白石に関して、キリスト教を排す際の根拠であった儒教が『対西洋の記号』として機能していく事態とも併走していた。

一九三〇年代、新たな帝国主義化の段階を迎え、膨張しつつある日本から「東洋」なるものをあえて発信しようとする言説の性格が明らかになる。それは、一度は否定すべき対象としての「東洋（中国）」を起点としつつ、「非西洋」の国家の実現者としての「日本」における「東洋精神」の結実を経由して（言説化して）、そこから改めて、西洋近代

を超克する「国民」創造の物語の中に発話されるべきものであったのである<sup>(1)</sup>。

しかも、こうした『Sido』物語 をモチーフとした三作品が抱えこんだ問題系は、「地球図」「獄門片影」が発表された昭和一〇年前後を第一のピークとし、「イノチガケ」が発表された昭和一五、六年を第二のピークとするかのように、それぞれの主題圏において活発な言表として機能していくことになる。その一例が、すでにあげた翻訳ブームであり、数年の後にそれは、近代の超克へと結実していく。言葉に関しても、昭和一〇年前後は国内の方言／標準語が議論されていたが、日中開戦を挟んで昭和一五、六年になると様相は一挙に顕在化していく。「文学」誌上では「東亜における日本語」（昭15・4）や「国語と国字」（昭16・4）という特集が組まれた他、雑誌「日本語」が創刊（昭16・4）されたのもこの時期なのである。こうした展開を、子安宣邦は次のように整理している。

世界の新秩序 を要求しての 大東亜戦争 の遂行は、「日本語」に英語に代る 東亜の共通語（第一外国語）としての位置を要求する。このことは「国語問題」史上にかつてなかった新たな事態、すなわち「日本語問題」の発生を意味した。それはまた「国語」概念との整合性が問われるような「日本語」概念の成立でもあった。この歴史的な



事態にあつて、すでに「国語」は新たに生起した「日本語問題」に対して防衛的に、より文化的保守主義的な概念へと再構成されていくとする。他方、「日本語」は現実の日本人の言語生活への強い学問的、教育的な関心と結び付き、「国語」のもちえぬ外的な視線をもふまえて、新たな概念として構成されていくとする<sup>15</sup>。

してみれば、本稿一末で示唆した『Sidon物語』をモチーフとした小説が世に問われた昭和一〇——一年／昭和一五——一六年が、先の第一・第二のピークに重なることは明らかである。それらに通底する歴史的な力学は、昭和一〇年前後には混沌としながらも確かに胚胎され、数年間、水面下でその輪郭を整えた後、国内／外の政治動向に呼応するかのようにさまざまな領域で同時多発的に顕在化し、小説にも少なからず影響を与えていくのだ。

みやすい事例として、「獄門片影」の作者・高木卓は、「遣唐船」(『作家精神』昭11・5)で昭和一一年上半年・第三回芥川賞候補となった後、「歌と門の盾」(『作家精神』昭15・3)で昭和一五年上半年・第一一回芥川賞に選ばれ、辞退している。両作とも歴史小説であり、文壇ではいずれの時期においても歴史小説ブームがおきていた。<sup>16</sup> 藤森成吉は「わが歴史小説観」(『文芸』昭11・7)で、『近年日本の文壇に本格的歴史小説の長篇が現れはじめ、新しい歴史小説時代が来つつある感があるのは、

注目すべき現象』だと述べ、その五年後、青野季吉は「歴史小説の印象」(『新潮』昭16・9)で『歴史小説と云はれるものがこの一年来、非常に多くなつた』と指摘している。前者においては転向作家の進む道として、後者では戦時下における安全なモチーフとして、歴史小説は活況を呈していたのだ。藤森成吉は『渡辺華山』(昭10・12、改造社)によって昭和一〇年前後の歴史文学ブームを牽引した一人だが、江戸後期、蘭学者のリーダーとも目されていた渡辺華山というモチーフは、石川淳『渡辺華山』(昭16・3、二笠書房)でも描かれることとなる。

総じて、『Sidon物語』をモチーフとした「地球図」、「獄門片影」、「イノチガケ」は、昭和一〇——一年／昭和一五——一六年という時期に小説化されたが、そこには、当時の歴史的な力学が関わっていたのであり、もつといえは、それゆえに上記三作品は外ならぬこの時期に成立したとみてよい。そしてその証左自体は、テキストに折り畳まれていたのだ。

### III

さいこと、「Sidon物語」をモチーフとした「地球図」、「獄門片影」、「イノチガケ」の歴史的な場所を仮説的に指し示すことで、今後の研究の足がかりを築いておきたい。

《不思議な暗号》によって連携していた「地球図」、「獄門片影」、「イノチガケ」三作品は、昭和一〇——一年／昭和一五——一六年と二度にわけて集中的に世に問われた。第二のピークに関し

では、すでに論じてきたように『Sōzō物語』に關わる複数の主題系が国内／外の政治と運動しながら顕在化していく時期に重なっており、通底する力学によって『歌と門の盾』が刊行され、『イノチガケ 後篇ヨワン・シローテの殉教』の発表・『炉辺夜話集』の刊行が果たされた。となれば、事態が顕在化する前の第一のピーク時に、いかにして「地球図」「獄門片影」が、歴史に反応し得たのかが疑問として残るはずだ。

第一のピークと重なる昭和一〇年前後、明治維新をモチーフとした歴史小説ブームはつとに指摘されるが、文芸復興期の他の多くのトピックの陰で、『Sōzō物語』とも關わる動きがあったのだ。それは、江戸時代における洋学（者）・外国をモチーフとした小説の隆盛である。間宮林蔵をモチーフとした貴司山治『洋学年代記』（『文学案内』昭和11・5）はその代表的作品で、多くの時評でとりあげられた。同作を『よく調つた読応へのする作品』と評した、正宗白鳥『文芸時評』（『中央公論』昭和11・6）を引いておく。

この頃、旧幕時代のオランダ学者を題材とした小説や戯曲がよく目につくが、今日の時勢とも關係があるらしく、いづれも面白いことは面白いが、かういふ題材も繰返して取扱はれてゐるうちに、千篇一律になる傾向がないでもない。<sup>17)</sup>

同様のモチーフをとりあげた作品として、管見の限りでは井伏鱒二「オロシヤ船」<sup>18)</sup>の他、藤森成吉の「火」（『改造』昭和11・5）、「三十年」（『中央公論』昭和11・12）などがある。

総じて、昭和一〇年前後に世に出た『Sōzō物語』とは、本稿IIで論じてきた諸条件に加え、「江戸時代における洋学（者）・外国」というモチーフが節合されて成立をみたのだ。それは、アジア・太平洋戦争やそれを思想的に支えていく「近代の超克」に代表される、『西洋（知）』との対峙を占う、過去の参照点という意義を担っていたはずである。してみれば、「地球図」や「獄門片影」は、作家性や典拠との關係ばかりでなく、後の歴史を織りなしていく水面下の力学を、鋭敏に感受して編みあげられたテキストだったのだ。

注(1) 浅原六朗「文芸時評【下】十二月の創作——新潮・日評・改造の諸作——」（『満洲日日新聞』昭和10・12・3）では、「地球図」によって太宰治が『十分な才氣を所有してゐる新進』だと評されており、当時から高い評価があつたこともみおとせない。

(2) 江間道助「文芸時評」（『早稲田文学』昭和15・10）で、「イノチガケ」は、舟橋聖一「北村透谷」とともに『歴史的人物の伝記を小説体に書いたもの』と評されている。

(3) 垣花秀武「奇会 新井白石とシドネイ」（平12・1、講談社）他参照

(4) 高橋秀太郎「太宰治「地球図」論——「物語」と「知識」——」（『日本文芸論叢』平12・3）

(5) 拙論「翻訳の織物——太宰治「地球図」精読——」

- (5) 「日本近代文学」平17・5)
- (6) 高木卓『北方の星座』(昭16・10、大観堂)
- (7) 《僕の打たれたのは、この作品の背後にある作者の捨て身になつた強さである》と評す光田文雄「作家の真情」(文芸時評)、「早稲田文学」昭15・8)では、「イノチガケ」に《作者の殉職者に対するあこがれのはげしさ》が読みとられている。
- (8) 成田龍一『歴史学のボジショナリティ 歴史叙述とその周辺』(平18・10、校倉書房)
- (9) キリシタン文献研究をてがけ、『Shōchū物語』にも論及していた新村出は、対米英戦を翌年に控えた時期の講演「新東亜建設と日本語の問題」(『啓明会第百一回講演集』昭15/引用は『新村出全集 第二巻』昭47・7、筑摩書房)で、『今日のやうな時勢で日本が世界的に進出せんとして居る 否既に進出しつゝある際に於て、外国・外地に於ける日本語の問題は、元来非常に重要性を持つて居つたわけであります。』と述べるに至る。
- (10) 原卓史「コイノチガケ」論(「無頼の文学」平10・4)、大原祐治『文学的記憶・一九四〇年前後——昭和期文学と戦争の記憶』(平18・11、翰林書房)、山内祥史「地球図」論・同(続)、「太宰治研究」平6・6、平8・1)
- (11) 姉崎正治『切支丹伝導の興廃』(前掲)にも、『シドチが白石の心に時いた西洋知識は、その後の人心の趨勢絵と相俟ち、社会の変遷に伴つて、段々西洋科学の吸収となり、開国気運の先駆になつた。』という記述がある。
- (12) 山城むつみ『転形期と思考』(平11・8、講談社)
- (13) この時期、中島健蔵「翻訳文学の諸問題」(「新潮」昭11・12)をはじめとして、テーマはそれぞれではあるものの、実に多くの翻訳論がみられる。
- (14) 中村春作『江戸儒教と近代の「知」』(平14・10、ペリかん社)
- (15) 子安宣邦『日本近代思想批判 一国知の成立』(平15・10、岩波現代文庫)
- (16) 紅野敏郎『昭和十年代の歴史小説』(「国文学」昭41・2)他参照。
- (17) 麻生博「随感」(「校友会機関誌」(富山高校)「昭11・6」)でも《近年こつした題材(江戸期の洋学/引用者注)を取り上げるものが多い折から、是非我々にはこつした洋学者を社会的に把握せねばならぬ》と、やはり同様の現象は一定の注目を集めていた。なお、松村友視「陰画としての 江戸——昭和一〇年前後の大衆時代小説——」(「講座昭和文学史 第二巻 混沌と模索」昭63・8、有精堂)も参照。
- (18) 初出は「オロシヤ船」(「新潮」昭10・12)、「梅香崎飯館」(「中央公論」昭11・4)、「レザノット」(「東陽」昭11・9)、後『集金旅行』(昭12・4、版画荘)に収められる。